

松山幸生先生講述

# ヘブライ人への手紙に学ぶ

1996年1月から1998年10月

全32回--26

2023年09月

写者

小原靖夫

## 第26回(2)

### 信仰の証人たちに囲まれて生きる

ヘブライ人への手紙第12章①節から⑬

主による鍛錬

- ① こういうわけで、わたしたちもまた、このようにおびただしい証人の群れに囲まれている以上、すべての重荷や絡みつく罪をかなぐり捨てて、自分に定められている競走を忍耐強く走り抜こうではありませんか、
- ② 信仰の創始者また完成者であるイエスを見つめながら。このイエスは、御自身の前にある喜びを捨て、恥をもいとわないで十字架の死を耐え忍び、神の玉座の右にお座りになったのです。
- ③ あなたがたが、氣力を失い疲れ果ててしまわないように、御自分に対する罪人たちのこのような反抗を忍耐された方のことを、よく考えなさい。
- ④ あなたがたはまだ、罪と戦って血を流すまで抵抗したことはありません。
- ⑤ また、子供たちに対するようにあなたがたに話されている次の勧告を忘れていません。  
「わが子よ、主の鍛錬を軽んじてはいけない。主から懲らしめられても、力を落としてはいけない。
- ⑥ なぜなら、主は愛する者を鍛え、子として受け入れる者を皆、鞭打たれるからでる。」
- ⑦ あなたがたは、これを鍛錬として忍耐しなさい。神は、あなたがたを子として取り扱っておられます。いったい、父から鍛えられない子があるのでしょうか。
- ⑧ もしだれもが受ける鍛錬を受けていないとすれば、それこそ、あなたがたは庶子であって、実の子ではありません。
- ⑨ 更にまた、わたしたちには、鍛えてくれる肉の父があり、その父を尊敬していました。それなら、なおさら、霊の父に服従して生きるのが当然ではないでしょうか。
- ⑩ 肉の父はしばらくの間、自分の思うままに鍛えてくれましたが、霊の父はわたしたちの益となるように、御自分の神聖にあずからせる目的でわたしたちを鍛えられるのです。
- ⑪ およそ鍛錬というものは、当座は喜ばしいものではなく、悲しいものと思われるのですが、後になるとそれで鍛え上げられた人々に、義という平和に満ちた実を結ばせるのです。
- ⑫ だから、萎えた手と弱くなったひざをまっすぐにしなさい。

⑬また、足の不自由な人が踏み外すことなく、むしろいやされるように、自分の足でまっすぐな道を歩きなさい。

①節前半、

こういうわけで、わたしたちもまた、このようにおびたしい証人の群れに囲まれている以上、

私たち自身について、または、そういう状況の中に置かれているキリスト者に対して、著者は「だから、あなたがたもそのように一生懸命神に従って来て、神の現臨を証し、神の唯一性を堅持、主張しなさい。どんなに大きな外的抑圧の中でも、ヤーウェこそ唯一の神、唯一の創造主にして贖い主にいまし給うことを拠り所にして、徹底的に生き抜いて来た人々のように。そして、そのように生き、歩み進んで来た彼らが、今や私たちを視ているのです、彼らが私たちの信仰を見つめているのです」と語ります。

『囲まれている』というの、「支えられている」「担われている」という『味方になって頂いている』との意味ではなく、「私たちはそういう人々の『監視の視線の中で』今を生かされている。そのような人々の歩み、業績、信仰が私たちの歩んでいく道の両側に積み上げられていて、彼らはそこから私たちを見張っているのだ」と述べているのです。

この間、私たちの教会学校に来ている一人の幼稚科の男の子が「お父さんと動物園に行つて来たんだよ」という話をしてくれました。<sup>163</sup>

多摩動物園に行つて、あのライオンバスに乗って来たんですね。そこで彼が体感したのは、非常に率直に子どもらしく感じたことで、「ライオンが、僕たちを見てたよ」と。動物園とは本来人間が動物を見に行く所なのですけれども、彼にとっては、そのライオンバスに乗ってライオンを観察するよりも、「ライオンの方が、僕たちを観察してる」というのを強く感じ取ったのです。

正にこのことが、そうなのです。素晴らしい信仰の先達たちがいて、その先達に見倣おうと著者は言っているのではありません。その先達が私たちを、まなじりを決して見張っているから、しっかりと彼らの視線を感じながら、祈りを感じながら、願いと訴えを聴き取りながら、「私たちは、今を生きてゆこうよ」と言っているのです。

ですから、この部分を、競技場に集まっている観衆が、アスリートたちを応援に来てくれているような感覚で読んでしまうと、違うのです。言い換えると、「本当にあらゆることを耐え抜いて生きて来た人々の瞳が、私たちが信仰の道を本当に誠実に歩んでいるかどうかと、注視している」のですから、私たちは、信仰の先達たちに単に温かく見守られている感覚でこの箇所を読んでしまうと、著者の真の意図とはかなりずれてしまうのです。

日本では最近、心がときめくグッドニュースがあまりありませんから、自分たちの願いが叶いそうだというトピックスが報道されると、皆一斉にそれに傾注し、熱狂し始めます。

「サッカー代表がワールドカップに出られそうだ」などと言いだめると、皆必死になってサッカー応援に行くわけです。彼らは「出場してほしい、勝ってほしい、だから応援しよう」というのでなく、「選手たちが、絶対出場すべきところに、必ず行けるよう、自分たちがハッパをかけてやらなきゃ」と、叱咤激励に行くわけです。

だから、ちょっとでもまずいプレイをやると、応援席からブーイングの嵐が巻き起こり、相手に勝たれちゃうと、後でとんでもないことを仕出かすくらいの熱さ激しさを持って、そのゲームを「見張りにいく」人たちが大勢出てくるのです。ですが、そういう「勝ちにこだわるサポーターの熱意」に、ある意味、刺激され、励まされ、お尻を叩かれながら、生き生きとサッカーグラウンドを駆け回るプレーヤーは沢山おられるのかもしれない。ここで著者が、ユダヤ人キリスト者に対して「あなたがたも、そういう状態に置かれていることを、しっかり認識しなさい。大勢の先達から見つめられ、叱咤激励されていることに意識を向けて歩もうじゃないか。そういう人々の求めに応えるには、ぼお〜としたり、モタモタしては、駄目ですよ」と告げるのです。

あるヨーロッパの有名な説教家が、この箇所を説教するときに「忍耐と疾走」という題で語りました。すごく面白いなと思います。「耐え抜くことと、すごい勢いで走ること」を説く彼は、その説教の初めに「忍耐と疾走というのは、本質的にまったく異なる二つの問題であって、元々相入れないものです。しかし、聖書は見事なまでに、その二つが一つであることを示しています。」と語り始めています。その方の説教を全部話すと2時間位かかりますから、そういうスタンスだけをひとまず受け止めて、その部分から話を進めて行きたいと思います。165

「私たちは本気になって全力で走り抜こうとすれば、他のことは一切気にしていられなくなります」これは常識的なことです。でも、二者の両立を綺麗事として果たそうとすれば「一切の絡みつく何とかを、かなぐり捨て」というように、走ることよりも「まず捨てることの忍耐」に懸命になり、やがて「そこまではとても捨てられない」と挫折、頓挫してしまう。すると「私はそれ程立派な信仰者ではない」と言いだめる。だが、本気になって全力で走ろうとすれば、周囲との比較や評価などは気にしていられないのです。

「私の信仰は」「私の状態は」とか「私はまだそんな強い信仰者ではありませんから」と、そんなことをぐずぐず言っている間は「まだ走っていない」のです、「レースに参加してもいない」のです。キリストによってスタートラインに導かれ、既にそこに立たされているからには、号砲と同時に、もうあなたは走り出さなければならない。だから「あなたが今できることは、このレースを全力で走り抜くことだけだ」と言われているのです。

周りを見回したり、自分にはそれができるかなと思案したりする余裕などないのです、唯今は前に向かって走るだけ、そのことのためにここに立っているのだから、一所懸命走りなさい。走っていれば、自分が弱い者だとか、駄目な者だとか、ああなんだ、こうなんだとか言っていられなくなります。

でも「この説教を本気で実践せよ」と私が号令をかけたら、教会員たちはすごく困るでしょう。「自分のような弱い僕は」とか、「まだまだ駆け出しですから」とか、「神学的にまだ十分理解出来ていませんから」と、色々な弁解を考え出し、何かあったら、その言い訳の陰に自分を隠そうと思うでしょう。

けれど、聖書はそうは言いません。「あなた方はイエスを信じているのだったら、つまらない弁解をしてもしょうがない。ああだこうだと言っているのは、未だ走っていないからだ、走ろうともしていないからだ」と言っているのです。それを踏まえて、教会の皆さんが同時に一緒に走ってゆけば、色々なことが「できない範疇には入らなくなる」のです。私たちは神が与えてくださった福音宣教のため、福音を福音とするために、今日を生き、明日を生きることに向かって、主から頂いた自分自身の賜物を残らずさらけ出して、走って行かなければなりません。

では、その走りが止まらないためにはどうしたらよいかと言えば、走り抜いて自分の足が疲れ果て、もう駄目だと思える時にも、「神がこの道を与えて走らせてくださるのだから、きっと走り抜けられる！」と信じて、走り続けるのです。

実は、「忍耐」は、そこで力を発揮するのです。それは「我慢する」という問題ではないのです。本来、「神に対する100%の信仰」があれば、あらゆることに対して「自分の可能性や自分の限界を問題にさせない力＝忍耐させる力」となりうるのです。私たちをそのようにしてくださっている「神に対する絶対的な信頼」が共にあれば、足がどんなに重くなっても、立ち止まることも、挫折することもあり得ないのです。<sup>167</sup>

そうした「神に対する100%の信仰」「神に対する絶対的な信頼」とは、人間には不可能な領域と思われませんが、その唯一の「模範」を、私たちはこの受難週という一つの大事な区切りの中で確認しております。それこそが「イエス・キリストの十字架」なのです。

人の目から見れば、イエスは「神に呪われた者になった十字架刑」についておられる。ところが「神はこのわたしの父であり、このわたしをお見捨てになることはありえない。神はこのわたしにすべての神の御恵みを注いでくださり、御業をなさしめてくださるのだ。」と、＜全幅の信頼、100%の信仰＞をもって、イエスは、呪われたと言われる十字架の上から、天の神に向かって声を上げられます。「父よ、彼らの罪を赦し給へ」と。

あの御言は、十字架の上では本来は発せられない言葉なのです。なぜなら、神に呪われたゆえに十字架に架かられたのですから「もう神からは断絶されている」と普通の人は判断します。ところが、その十字架上でイエスが「父よ」と、祈られたので、多くの人々の心は驚きで激震したのです。<sup>168</sup>

あの異邦の国ローマの百卒長でさえ、十字架の上で呪われたはずのイエスが、神から捨てられ十字架の上でなお神に声をあげ、神に祈り、神の声を聞き、神のわざを進められている、そのイエスを知った時に「本当に、この人は神の子であった」と言わざるを得ない衝動が、天から与えられたのです。

耐え忍ぶことは、歯をくいしばって、ぎりぎりの場に立つことではない。神を信じることから起こってくる極めて自然な生きざまを為す力と、信じ抜くことによって与えられる神の御力、それらが『忍耐させる力』と結集するのです。

この手紙が書かれた時代は、「グレコローマンの文化が支配している時代」でしたから、忍耐強く生きることを色々な格好で表現していますが、特に聖書の中でよく出てくるのは『競争』です。走り抜くという言葉や、打ち合いのボクシングです。

「空を打つような拳闘はしない」言い換えれば、自分の肉体の限界を晒さなければできないようなスポーツを取り上げ、その中でそれをやり抜くために与えられるのは、日本語で言えば「根性」です。「どこからこんな根性が出て来たのだろう」とか「たたき上げられた、ど根性」など色々なこと言いますが、それは、究極的には「信仰からでしか、生まれ得ないもの」なのです。

それと同様に、私たちがイエスをキリストと信じることを以外には決して起こり得ないことだと、この著者がいつも言っている事柄に、この先、目を向けたいと思います。

第①節後半から②節前半、

すべての重荷や絡みつく罪をかなぐり捨てて、自分に定められている競走を忍耐強く走り抜こうではありませんか。信仰の創始者また完成者であるイエスを見つめながら。

「忍耐強く走り抜く」のは、自分の栄冠を期待しているからではなく、この世の人々から誉れを得ようとするからでもなく、信仰を与えてくださったイエスがそう走られたゆえであり、イエスに目を注ぐ時、そのような走りがゆるされ、忍耐力が与えられるからです。

パウロはそれを、ローマの信徒への手紙の中で、裏返しの言い方をしています。「信仰がなくては神に喜ばれることはできない」と。神に喜ばれるとは、神の祝福を心一杯に受け取ることです。そして最期の祝福は、神の御言に従い、神は御独りと信じ、どんな状況下にあってもイエスにのみ目を注ぎ、精一杯、信仰人生を走り抜いたことへの御報いです。

第②節後半、

このイエスは、ご自身の前にある喜びを捨て、恥をもちとわなないで十字架の死を耐え忍び、神の玉座の右にお座りになったのです。

「イエスの御前にはあるが、御自ら捨て去った喜び」これは恐らく「御自分の安泰とか、人間との和平とか、大勢の人々との親睦とか、更に、この世での名誉、名声とか、そのようなものまで、イエスの『喜び』という言葉の中に、著者は包んだのだろう」と思います。ところが、そのようなものをすべて、十字架上のイエスはかなぐり捨てられた。更に、神の御子なる真価、神的な御力の発動、多くの人々の期待と信頼と愛着に応える喜びなど、そういうものまでも、全部お捨てになった。

福音書の中にもそうしたことが出て来るところがあります。

「私は多くの人の手にかかって死にます」主がそのように話されると、ペテロがイエスの前に出て行って「先生、とんでもないことです。(そんなことになられたら、今まで築かれてきたものは、すべておしまいになります。だから) あってはならないことです。」と。するとイエスは、「退け、サタン！」と厳しくお叱りになった。「あなたは神のことを思わないで、人のことを思っている」と。

「わたしにとって大事なものは、どうしたら滅びに立っている人々が救われるかという問題なのだ。そのことのためなら喜んで自分の命を捨てる」と仰るのです。そのことを聖書の言葉を借りれば「自分の喜びは捨てた、恥をも厭わない」となるのです。171

この「恥」という言葉は、日本人の考えている恥とは大分違った、意味合いの深いものです。例えば、その人が完全に無視され排除され、捨てられる、その人の名が記憶から抹殺されるという状況を、この「恥」という言葉は体現しています。つまり、「多くの人の記憶にその名声が留められ、榮譽を受けるのが『神からの賞 (award) 』だとすれば、その人の名が無意味で全く忘れ去られることが『神からの恥 (discount) 』なのだ」というコントラストをもって描かれる言葉なのです。

著者は、イエスが十字架に架かる道は、「主イエスの御名が、十字架刑の常識から言うならば、まったく価値のない、無意味のものとして捨てられ、忘れ去られてしまうかのような道だった。十字架に架かるとはそういうことなのです」と言っています。

ところがイエスは、そこにしか人々を救う道がないとお考えになったのだから、もう御自分がこの世から抹殺されようが、御名がこの世から消え失せようが、そんなことは一切厭わないと十字架を担われたのです。

本来、呪いの十字架、恥の十字架、神から捨てられた者の十字架ですから、「それをイエスが担われるのは、この世的には、恥を背負われたことに通ずる」わけです。

そして、これは私たちキリスト者の生き様に通じる問題なのです。172

例えば、「あの人はいい人だった」と言って貰いたくて生きている限り、イエスの後について行ってはいない。イエスに従うことは、定評の喜びを捨てて、十字架の恥を担うことだからです。でも、なかなか恥は積極的には担えないですね、恥はかきたくないと思っ  
ていますから。だから、失敗してもなるべく上手に取り繕って、恥でないようにするのが一般的ですが、ここでは「イエスは、あえて、十字架の恥を担うことによって多くの人々を救われた」のです。

## 「十字架の死を耐え忍び」

この言葉も、著者がイエスに対して『肌身を感じる身近な言葉』として書いています。イエスを崇め、素晴らしい神の御子だとしたならば、普通「十字架の御苦しみを忍ばれた」ではなく「従容として死におつきになった、喜びと感動感激を覚えて死地に赴かれた」と書くでしょう。

しかし、著者は「たとえ神の御子であっても、十字架の責め苦を耐え忍ぶのは大変な問題だった、逃げ出したくなるような重大極まりない問題だった」と描いています。更に筆者は、イエスに対して『神の御旨がどうすれば立つか』にすべてを集中して、その激しい苦しみを耐え忍ばれた御方として描いたのです。

この十字架刑については、私たちは生活体験の中にはありませんので、その御苦しきは、いかばかりかと実感するどころか、想像することすら、とても適いません。今年「受苦日」の前日に、教会の役員の方々に「今朝九時から午後三時まで何もしないで祈っていなさい、それがあなたの受苦日の過ごし方で一番いい過ごし方なのです」と申し上げたのです。そして、翌日の夕べに、受苦日の祈祷会を持ったのですが、その方々に「どうでしたか」と聞いたならば、「祈っていくと、ああ、あのこと、このことと次々考えて、イエス様の十字架よりもこの世のことを沢山考えました」と言われるのです。「あの人に声をかけてあげなければいけなかったかな、イースターの備えをまだしていなかったかな、というのが、すごく気になり始めた」と言うのです。

私は、それも、イエスが十字架にお架かりになった御姿の一つだと思います。イエスは十字上で何を考えられたかと言うと、神に背を向けた人々のことを考えられた、裁かれるべき魂のことを考えられた。それは御自身を計算から外してゆくことです。御自分の命と引き換えに、他人の命を建て上げてゆくこと、それがイエスの十字架だったので、ある意味では役員さんたちの祈り方はそれで一つは達成できたと思うのです。（でも、それで事足りりとしてしまっはいけないとは思いますが。）

イエスの、手に釘をさされ、さらし者にされ、人々の目の前に自分の十字架が立てられているという苦しみがどんなものであったか。一晩中引き回されて、裁判から裁判にかけられ、朝六時に衣を剥がされ、十字架につけられ、午後三時まで耐えられ、その苦しみを十字架の上で耐え忍ばれた。「それが私自身の罪のためだった」というところに気がつく、イエスの十字架のもっている御力、十字架の御恵みは本当に私たちの心の真中にしっかりと落ちて来るだろうと思います。

## 「恥をも厭わないで十字架を忍び」

という言葉は、素敵な言葉だ、綺麗な言葉だということになってしまう危険性はすごくあります。この手紙の中でそういう犠牲的な苦難の生き方をした人は他にもいましたが、イエスほど徹底した生き方をした御方はありません。

この御方によって初めて、人間が神の御前に執り成され、罪が赦され、聖められたという喜びのメッセージ、救いの福音を伝えることができたのです。

このことによって私たちは救われたという喜びをはっきり書いたのが、その最後の部「神の玉座の右にお座りになったのです」という言葉です。

主は真の勝利者になられたのです。神のなさろうとすることを完全に終えられた「証拠」として、彼は神の右にお座りになっておられるのです。別な言い方をすれば、その御方が「審き主になられた」ということをここでは告げているのです。

あなたがたは、自分のやっていることに疲れ果てたり、周りからの攻撃に意気沮喪したりしないために、頑張りなさいとか、訓練しなさいとか、トレーニングしなさいとか、この著者は言わないのです。そのようなことをしても限界がありますよ。どんなに肉体を鍛えるために自らに攻撃を加えて頑張ってみても、人間の限界とは、自分の存在性が破壊されるところまでは行かない（神が護られる）のです。だが、イエスは御自分の存在性が破壊される（神に呪われる）ところまで行かれた。「十字架というのは、正にそのことです」と。

本当にイエスに従って生きようと思ったら、自己訓練をしようとか、努力をしようとかということをやめて、「唯、イエスを見上げなさい」と言うのです。すごい言葉です。

### 第③節

あなたがたが、気力を失い疲れ果ててしまわないように、御自分に対する罪人たちのこのような反抗を忍耐された方のことを、よく考えなさい。

ここで「反抗」という言葉が出て来ます。

聖書の中には「反抗」という言葉と「抵抗」という言葉とがありますが、一つのことに對してリアクションをおこして闘って行こうとする意志に対して、この③節では、反抗という言葉を使っているのです。

この「反抗」という言葉は、実は「アンティロギア」という言葉を訳したものです。アンティロギアは、ロゴス（言）という言葉の変形ロギアに、アンティ（抵抗すること）ですから、真理に抵抗する、反対する、権威に反対することなのです。つまり、罪というのは、このアンティロギア（神の御言や御心に対して反対すること）なのです。

それに対して、「抵抗」という言葉は、「アンティカステリアン」という言葉なのです。その意味は「カステリアン（神なき権力）に対してアンティ（抵抗すること）」です。これは、正義による権力を与えられることによって、歪んだ力、疎外する力に抵抗してゆくこと、または、正義を疎外しようとする者に対して抵抗してゆくこと、反対してゆくこと



と、排除しようとしてゆくこと、つまり、これが聖書における「抵抗」という言葉の意味なのです。

神からの権威を与えられない限り、その権威に抵抗する力が何であるかを見極めることはできません。神が体をお創りになり、そこへ吹き込んでくださった霊の息を、価値がないように取り扱おうとする一切の力に対して抵抗すること、ノーと言うこと、それが神の御言を生きることになるわけです。ですから、その意味においては、「教会にとって都合がいい」とか、「私たちの信仰生活にとって都合がいい」とか、そのような『ご都合主義のモチベーション』でもって、どう振る舞うかの問題ではないのです。

「神の権威（神によって吹き込まれた霊の息）に対して、否定する一切の力を排除してゆくこと」、それこそが正に、聖書でいう「抵抗」という言葉の中身なのです。<sup>177</sup>

「真理に逆らうものには力がない」と旧約聖書に書いてありますが、私たちは真理に逆らうことを、そうとは知らずに、数多く冒し続けています。

それを弁えるには、丁度最後の晩餐の時に、イエスが弟子たちの足を洗いながら、「この世で権威ある者とされている人たちは、人に仕えられることを好む。だが、わたしは、あなたがたにとっては権威ある者だが、（奴隷のように）あなたがたの足を洗い、膝をかかめたではないか。だから、あなたがたも互いに仕え合う者となりなさい」と仰ったことを、常に想起すべきである。

主は「本当のリーダーシップとは、人々が、自分の存在によって喜びを感じ、平安を感じ、そして、今生きていることに感謝できる状態を作り上げることですよ」と仰る。

例えば私たちは「今生きている現状に対し、感謝ができるように」と言うと、すぐに、「神に現状を変えて頂こう」と考えます。病気の人を治して頂くことが感謝であると。確かにそれはそうですが、イエスの仰っていることは、もっと霊的次元の高いことで、「病気に支配されている人が、その支配力を感じなくなること、神によって与えられた自由によって、病気という拘束の力を無意味なものにしてしまうこと」であり、今生きていることへの感謝は、現状賛歌から始まらなければいけないのです。

例えば、賛美歌の歌手で、両腕の無いレーナ・マリアさんが日本に来られて「私は神の御前に自由な者です、幸いな者です」と告げられても、日本人の心にはなかなか通じない。

「あの人は偉いね」となってしまう。彼女は「私が偉いんじゃない、私自身は半端者なのです」と証しの中で盛んに語っておられます。しかし日本人は「あんな状態でありながらも、神を讃美しているあの人は偉い」と、神でなく、彼女自身を褒める。これではせっかく彼女が神の恵みを証ししても「福音にならない」のです。

「あの人があんなに体のことから自由になり、幸せになっているのは、イエスが贖ってくださったからであり、キリストの十字架の功しなのだ、イエスの十字架はなんて素晴らしいのだろう」ということを目指しているのに、神を知ろうとしない日本人は、やはり「人

間の手柄止まり」なんですね。そういう人々に向かって福音を福音として語ってゆくのは、すごく難しいことです。

ですが、その困難を困難としないで、耐え忍びながら、福音を宣べ伝えてゆくことは、「正にイエスの十字架を共に担うという方法においてしか成し得ないこと」なのだろうとも思います。

「イエスは十字架を決して苦にはなさらなかった。ですから、神に御心を行なってくださいと祈れたのです。十字架でもうおしまいだとはお考えにならなかった。神の御力は、この絶望状態を通してでも歴史の中に力強く流れ込んで来るのだとお考えになったからこそ、イエスは十字架にお架かりになった」のです。

ですから、もう私は絶望だと思うような状況に陥っても、「十字架上で希望を抱かれたイエスを見上げて、『いや、絶望なんかどこにもない』と確信をもって、立ち上がって行きなさい」というお勧めが、この第③節なんですね。

第④節、

あなた方はまだ、罪と戦って血を流すまで抵抗したことはありません。

③節までを受けてそう語るのです。

この④節は、実は「私が献身をするきっかけになった御言」です。

私たちはイエスのためとか、福音のためとか、神の愛をこの世に伝えるために何かしましょうと考えても、「自分がそこで無になってしまうまで、自分のすべてを使い尽くすまでのことはしていません」と著者は告げています。

また反対に「あんまり汗をかかずに格好よく、多くの人々に納得してもらえるように、福音を宣べ伝えていきましょう」と目論んでも、なかなかそう守備よくはいかないのです。

私は、若い時代には、「教会教育ということを一生涯懸命進めていって、一人でもイエスのことが分かってくださる人が出てきたらいいな」と考えながら教会教育のために献身してゆこうと思っていたのです。それで東京学藝大学で教育のことを勉強しようということに進学したのですが、結局、そうやって一所懸命教会に奉仕する活動を展開してゆく中で、「私自身がしっかりとイエスと結び付いて、自分を神の御前に献げ切っていないと、その代わりを、誰かがしなければならなくなる」ということをすごく強く感じさせられる出来事が起こったのです。

その頃、私が行っておりました阿佐ヶ谷教会では「週間教会学校（ウィークデイ・チャーチ）」というのをやっており、学校帰りの子どもたちが教会にやって来て、聖書の勉強をし、一緒に祈って色んな活動を展開してゆく。沢山の子どもたちが集まって来て、そんな活動をしていたのです。

ある日、用事があって夕飯時のちょっと前なのですが、週間教会学校に通っているひとりの子どもの家へ行ったのです。声をかけたらば、丁度夕飯が始まるころでした。その子

どもが食前のお祈りをしているのです、一所懸命に。するとお父さんが「お祈り早くやめろよ、お腹すいているんだからさ」と、彼の祈りを制しました。

私は、その言葉を聞いて愕然としました。この子がこんな闘いをしていることも知らず、「食前には祈りましょう」と当たり前のように言って来た自分に。「家庭の中で闘っているのは実はこの子なんだ、自分はそんな闘いをしている子どもを送り出しながら、自分自身は命を懸ける闘いをしていないじゃないか。やはり本当に大人を変えて行かないと、子どもたちの素直な信仰は伸びてゆかないのだ」そんな風に思わせられたので、「そのためには、伝道者になる以外にない」と決意したのです。

「罪と戦って、自分は血を流すまで抵抗したことがない」その子の姿を見たたん、そう示されたのです。<sup>181</sup> 「ところが、この子は血を流すまでの闘いをしている。心が潰されるような思いをしながら食前の祈りを続けている。そういう一人の子どもの真剣な姿の中に、やはり私は、十字架を担うという意味を強く感じた」のです。それで、大学を出るとすぐ神学校に行くことにしたのです。

「この抵抗は、神の権威を護るために闘うことなのです」  
真理を真理として押し通すために、それ以外のこの世の力をはね除けていくこと、それが「抵抗」ですから、それをしないと本当に神の国を神の国として、この地上にその一部でも形づくっていくことはできない。教会に神の国の雛形を感じてもらうことができないことを、その時、大変強く感じたわけです。

その後は「訓練、鍛練の問題」が出て来ますが、「神に鍛えられるということは、神に愛されているということだ」という聖書の語りかけを、子どもたちのお父ちゃんたち、お母ちゃんたちにじっくり聞かせなければいけないですね。<sup>182</sup>

怒るのでなく、子どもに注意して叱るということは、子どもを根本的に信じて、愛している証拠です。親が自分の思い通りにならないからと、感情的に怒ってはいけません。そのことを本気になって今の時代の中で訴えていかないと、子どもを正しく叱ることができない親は、親ではないとまで書いてあるものがあるのです。

「子どもから信頼されているだろうか、こんなこと言うと子どもがグレちゃうんじゃないか」と心配する比較的若い親がいます。愛され大切にされている人から言われた言葉は、やや厳しい言葉でも、それによって反対行動をとることはないのです。できないことに対しての心痛は感じて、そのことのゆえに親を憎んだり離れたりすることはないのです。

## 第⑤節から⑨節

また、子供たちに対するようにあなたがたに話されている次の勧告を忘れていません。

『わが子よ、主の鍛練を軽んじてはいけません。』

主から懲らしめられても、力を落としてはいけない。

なぜなら、主は愛する者を鍛え、子として受け入れる者を皆、鞭打たれるからである』。あなたがたは、これを鍛練として忍耐しなさい。神は、あなたがたを子として取り扱っておられます。いったい、父から鍛えられない子があるのでしょうか。もし誰もが受ける鍛練を受けていないとすれば、それこそ、あなたは庶子であって、実の子ではありません。更にまた、わたしたちには、鍛えてくれる肉の父があり、その父を尊敬していました。それなら、なおさら、霊の父に服従して生きるのが当然ではないでしょうか。

神から頂いた賜物を神のためにお役に立てることができた時に、初めて私たちは一人前になれるのです。そうなれるように、神は私たちを愛し導いてくださっておられるというのを、ここでは「箴言」の言葉を引用しながら、著者は書いています。

### 第⑩節から⑬節

肉の父はしばらくの間、自分の思うままに鍛えてくれましたが、霊の父はわたしたちの益となるように、御自分の神聖にあずからせる目的でわたしたちを鍛えられるのです。およそ鍛練というものは、当座は喜ばしいものではなく、悲しいものと思われるのですが、後になるとそれで鍛え上げられた人々に、義という平和に満ちた実を結ばせるのです。

だから、萎えた手と弱くなったひざをまっすぐにしなさい。

また、足の不自由な人が踏み外すことなく、むしろいやされるように、自分の足でまっすぐな道を歩きなさい。

「あなたの手は曲がっていますよ、あなたの膝は曲がっていますよ」これを、日本流に言えば「お前の根性はひねくれているよ」と言うことで、だから「真っ直ぐな心でイエスを見上げなさい」と言います。これはとっても大事なことです。

自分が萎えていると気が付かない、自分では曲がっていると思われなくても、意識せずに放っておくと自然に曲がって来るのです。そうすると、自分が一所懸命真っ直ぐ歩いている積もりでも曲がってしまう。あるいは自分がしっかり物を運んでいると思っても、きちんとした場所まで行かないで、途中で落っことしてしまったりするのです。187

それは、自分が意識しない内に他の力によって、聖書の言葉を借りれば、「サタンの力」によって、私たちがへし曲げられてしまっているのです。素直に神の御言を聞けない、神を見上げられない、神の御言に従えない、という姿を「萎えた手と弱くなった膝という言葉で表現している」と、お読みになって頂ければよいと思います。

この辺は、皆さんお読みになってよく分るところだと思いますし、こんなことが私にもあったとか、私の子どもの頃はこんなこと感じたなとか、親になってからこう思っているなというところが沢山出て来ると思いますから、皆さんがたが、それぞれにそうお感じになればそれでよいのではないかと思います。

(一九九八年四月十一日)

## 写者あとがき

今回の驚きは松山幸生先生ご自身の「献身」の動機が突然飛び出してきたことです。それも「罪と戦って、自分は血を流すまで抵抗したことがない」（④節）の言葉の説き明かしの場面です。先生のご献身の思いを辿るべく③節までを丁寧に読んでみました。

1、①節後半「このようにおびただしい証人の群れに囲まれている」

囲まれているとは「私たちはおびただしい証人の『監視の視線の中で』今を生かされている」ということは「本当にあらゆることを耐え抜いて生きて来た人々の瞳が、私たちが信仰の道を本当に誠実に歩んでいるかどうかと、注視している」のです。「大勢の先達から見つめられ、叱咤激励されていることに意識を向けて歩もうじゃないか。

2、「本気になって全力で走り抜こうとすれば、他のことは一切気にしていらなくなります」「周囲との比較や評価など気にしてられない」「自分の信仰が弱いとか、ぐずぐず言わないで、今できることは、このレースを全力で走り抜くことだけだ」「主から頂いた自分自身の賜物を残らずさらけ出して、走って行かねばなりません。「神がこの道を与えて走らせてくださるのだから、きっと走り抜けられる！」と信じて、走り続けるのです。

（なすべきことはただ一つ、後のものを忘れ、前のものに全身を向けつつ、神がキリスト・イエスによって上へ召して、お与えになる賞をえるために、目標を目指してひたすら走ることです。フィリピ信徒への手紙 3章13b 写者引用）

3、忍耐はそこで力を発揮するのです。神に対する100%の信仰があれば（神に対する絶対的な信頼）、あらゆることに対して「自分の可能性や自分の限界を問題にさせない力＝忍耐させる力」となり足がどんなに重くなっても、立ち止まることも、挫折することもあり得ないのです。耐え忍ぶことは、歯をくいしばって、ギリギリの場に立つことではない。神を信じることから起こってくる極めて自然な生きざまをなす力と、信じ抜くことによって与えられる神の御力、それらが『忍耐させる力』と結集するのです。

4、このことをキリストは呪いの十字架上で示された。「忍耐強く走り抜く」のは、自分の栄冠を期待しているからでなく、この世の人々から誉を得ようとするからでもなく、信仰を与えてくださったイエスがそう走られたゆえであり、イエスに目を注ぐ時、そのような走りがゆるされ、忍耐力が与えられるからです」（①節後半から②節前半）

5、「信仰がなくては神に喜ばれることはできない」神に喜ばれるとは、神の祝福を心一杯受け取ることです。そして、最期の祝福は、神の御言に従い、神は御独りと信じ、どんな状況下にあってもイエスにのみ目を注ぎ、精一杯、信仰人生を走り抜いたことへの御報いです。

6、『恥をも厭わない。』この恥とは完全無視、排除され捨てられる、その人の名が記憶から抹殺されるという状況をいう。完全なディスカウントの状態（人間的には最も辛いこと）イエスが担われたのは、呪いの十字架、恥の十字架、神から捨てられた者の十字架であった。たとえ神の御子であっても、十字架の責め苦しみを耐え忍ぶのは大変な問題だった。更にイエスは『神の御旨がどうすれば建つか』にすべてを集中して、その激しい苦しみを耐え忍ばれた。イエスは十字架上で何を考えられたかということ、裁かれるべき魂のことを考えられた。ご自分の命と引き換えに、他人の命を建て上げてゆくこと、それがイエスの十字架だった。人間の限界とは、自分の

存在性が破壊されるところまで行かない（神が護られる）のですが、イエスは御自分の存在性が破壊される（神に呪われる）ところまで行かれた。

7、このことを通して「神の玉座の右にお座りになった。」しかし、「あなた方はまだ、罪と戦って血を流すまで抵抗したことはありません。」

ここで、松山幸生先生は食前のお祈りをする少年の家庭の様子を直視された。

「私自身がしっかりイエスと結びついて、自分を神の前に献げ切っていないと、その代わりを、誰かがしなければならなくなる」ということをすごく強く感じられた。東京学芸大学を卒業されてすぐに神学校に行くことを決意された。「大人に伝道しなければならないと。」

本文の繰り返しの引用ですが、松山幸生先生の燃えるような信仰の原点、真理に命をかけられた信仰を知るにはこの方法しか見つかりませんでした。言いようのない感動を覚え茫然としています。我が身を振り返って反省しきりです。

今回も丁寧な推敲を通して私の足りないところを沢山補って松山幸生先生の品格を保つことができました。また、説教をいただき感謝いたします。

2023年9月6日

## 「神の愛 アガペー」

森 容子

コリント人への手紙一 4：7-9節

始めに、4章7－8節をお読み致します。

愛する者たち、互いに愛し合ひましょう。愛は神から出るもので、愛する者は皆、神から生まれ、神を知っているからです。愛することのない者は神を知りません。神は愛だからです。

聖書には、神様が、私たち人間と人格を介したお交わり・関わりをもつことを望まれると共に、私たちに、御自身を知らしめたいと願っておられることが、随所に示されております。

ですから神様は、私たちをロボットのように、御自分にかしずかせることをお望みではありません。むしろ、私たちに可能な限り、自由意志を与えられ、それを尊重してくださいます。神様は、私たちが自発的にこよなき喜びとして捧げる礼拝、感謝と賛美のお祈り、高らかにほめ謳う讚美歌、感動して聞き従う御言、御声・・・そして、豊かなご臨在の中での私たちと双方向のお交わりを、願われるのです。

ですが、自己愛、自尊心という前提を抱えている人間との交わり、関わりには、神様の側に大きなリスクが伴います。人間が、報いというものを全く求めずして、純粹に神様を愛し、隣人を愛するという事は、ある意味至難の業とも思われます。

(人間を神様の似姿に創られながらも、他者性を尊重しすぎたことを、ちょっと後悔しておられるのでは、とも。いやいや、神様の御業に不完全はあられません。)

皆さんは、神の愛、ギリシャ語でアガペーをどのように定義しておられますか？

「報いを求めぬ無償の愛、十字架に象徴される気高い犠牲と厳かな赦しの愛、神様に愛される値打ちのない者（ある意味、人間は一人残らずそうなのですが）そうした罪人や敵をも赦し導く愛、また、障がいのある方や病人、生活困窮者など社会的弱者を包みこんでこよなく愛する愛・・・」などと言われますね。

そして、そうしたところから、「アガペーは究極のやせ我慢」とか「痛みのないアガペーはない」などと語る方々もおられます。しかし、そこには、イエス様とは程遠い、ご自分たちの上から目線や、ご自分の世界との区別、差別という濁った見方が、現れているのではないのでしょうか。

神の愛アガペーは本来、無理強いのある愛、我慢と窮屈の愛ではありません。アガペーには、愛と言う意味に加えて、愛餐・親睦と言う意味があり、更に、アガソス：良い・善なる・正しいという意味や、アガリッアシス：喜び・楽しみという意味を包含して捉えるのが良いと思います。

ですから、アガペーは、もっと自由で、もっとおおらかで、もっと豊かで、もっと温かく、もっと親しく、主に在る喜びが泉のように湧き出てくるような、分け隔てのない、自然な「心の発露」をいうのです。そうです、アガペーは行使する側においても、至福と感謝そのものなのです。

そのような愛は、愛の主から生まれえずして、どこから発出してくるのでしょうか。本来、持っていないものを、自力で絞り出そうとしても、美味しさや甘みや温みもりのあるものは、一滴も出てまいりません。

では、その先の御言、9節をお読みしましょう。

神は、独り子を世にお遣わしになりました。その方によって、わたしたちが生きるようになるためです。ここに、神の愛がわたしたちの内に示されました。

ここに、私たちへのキリスト・イエス様の十字架の御愛が述べられています。それと同時に、御独り子を世に給わるほどの父なる神様の御愛が示されています。

それによって、死と云う切、定められた闇路に向かってとぼとぼと歩いていた私たちは、方向転換させて頂いたのです。うな垂れていた顔を高く上げ、輝く御国、永遠の命に向かって、生き生きと歩み出す、新たな希望の道が開かれたのです。

主イエス様は、およそ3年もの間、日々食卓を囲んだ弟子たちと、いたく離れがたく思われたことでしょう。愛：アガペーには、愛餐・親睦という意味があると先程申し上げましたが、直弟子を始め、主をお慕いする私たちを、永遠の御国での素晴らしい愛餐に招待したい、親睦の交わりを更に深めたいと切望されたイエス様は、私たちには越えるに越えられぬ罪の川を何としても越えさせるため、御自らの御体を裂かれ、御血潮を流されて、御父との和解の切符を切ってくださいたのではないのでしょうか。そして、かの日には、御国の門の前で私に、御国の住人に相応しい、真っ白いキリストの聖衣を着せかけてくださることでございましょう。

そんな御愛を、私たちは、主の贖いとか、主の犠牲の愛と讃えています。ですが、十字架上のイエス様には、犠牲とか、生け贄とか、宥めの供え物（スケープゴート）、というような強い悲壮感は、もはや、おありにならなかったのではないかと、私は思い始めました。

私は、主の十字架の御苦しみを唯きれいごとにし、軽んじようとしているのではありません。人間の一生に降り積もった罪責を拭かれるために、究極の御苦しみをその御身に引き受けてくださった、とてつもない恩恵を忘れたわけでもありません。

けれども、十字架の上の主は、最高最善の御愛を、主の隣人なる私たちに注ぐことのできた御喜びと達成感に、御心が最高度に満たされておられたのではないのでしょうか。これが真の神の愛アガペーであると、私は信じます。

この気高き、最高最善の神の愛を、人生を懸けてこの世に伝えるためにこそ、私たちは選ばれ、この世に遣わされたということも、神の真実であられると存じます。

ここで、もう一度、最初の7節に戻しましょう。「愛する者たち、互いに愛し合ひましょう。」というお勧めがありましたね。

アガペーは、隣人愛にストレートにつながっています。なぜなら、神の愛の働きは、多くの場合、隣人たちを通して為されるからです。ですから、隣人に働きかける愛の行使は無論大切ですが、隣人からご提供される愛についても、神様からの愛に由来するものとして丁寧に取り扱い、心から喜び、感謝してお受けすべきです。

神様を愛することは、即ち、自分自身を愛することに繋がり、隣人を愛することに繋がります。神の愛アガペーは、神様を頂点とし、自分自身、隣人を底点とする三角形で表すことができます。この三者は、どれが欠けても、愛なる観念は成立しませんし、三角形が歪んでしまうと、健全とは言えませんから、絶えずチェックが必要です。その関係は、正三角形となるのが理想的であるとも言われています。

そして、この愛の正三角形は、私たちの主なる御方の教会を堅固に形成します。神御自身が礼拝者たちを招かれる主日は、神の愛アガペーが満ち満ちている「聖なるひととき」であり、そこで心打たれ、神の国を味わい浸るひとり一人が、知らず知らずに主の似姿に変えられてゆくという「神の出来事」が、毎週毎週、繰り広げられてゆきます。 ハレルヤ